

雅楽だより

《目次》

| | | | | |
|----------------------|-------|---|-------------------------|----|
| ●高句麗、百濟、新羅の時代の笙の演奏 | 金 聖恵 | 1 | ●和琴・箏選定保存技術保持者認定 小川真紀夫氏 | 10 |
| ●「調子・入調」演奏会プログラムより | 宮田まゆみ | 4 | ●情報欄 | 10 |
| ●常設の雅楽舞台 九州 筑紫楽所を訪ねて | | 5 | ●計報 小野功龍楽頭急逝 | 12 |
| ●雅樂いろいろ Q & A ⑪ | 芝 祐靖 | 8 | ●『雅樂の奈良を歩く』発刊 | 12 |
| ●古楽譜・古楽書でたどる雅楽の歴史 17 | 遠藤 徹 | 8 | ●『雅楽だより』合冊発行 | 12 |
| ●現代語訳『楽家録』(2) | 遠藤 徹 | 9 | | 12 |
| ●「林邑楽ベトナム・フェリ帰り公演」 | 藤岡信宏 | 9 | | 12 |

第39号
発行

2014(平成26)年10月
雅楽協議会

高句麗、百濟、新羅の時代の笙の演奏

新羅文化遺産研究院 学術研究長

金聖恵

笙に対する韓国での研究は、これまで主に朝鮮後期（17～18世紀）とその後の日本強占期時代の笙の楽譜と演奏法、民間の笙の文化に集中していたと言える。したがって朝鮮時代以前の笙、すなわち古代人の笙の文化に関する研究と、今日韓国で演奏されている笙と短簫との合奏がいつから始まったかについては、本格的な研究が試みられていない。

しかし、筆者が20年余の間に古代の音楽考古学資料、特に慶州（キヨンジュ）の古代の

寺院（7世紀～9世紀）の跡から出土した瓦の模様の彫刻などを調べた結果、笙の演奏の彫刻と、古代文献に記録されなかつた楽器（短簫）が古代の遺物に登場するという事実が明らかになった。そのいくつかを紹介したい。

迦陵頻伽が笙を演奏

新羅時代の屋根瓦に彫刻

上の写真（図1）は、迦陵頻伽が笙を演奏する姿が彫刻されている直径14・3cm、厚さ2・2cmの屋根瓦（軒丸瓦）である。この瓦の出土地は明確になっていない。しかし、同様の模様の屋根瓦（軒丸瓦）（図2）が、新羅の都であった金城（現・慶州）の皇龍寺からも出土された。この皇龍寺は、新羅（553～569年）の時代に創建されたので図1の瓦も同時代に作られたものであることは疑いがない。

現在は国立慶州博物館の所蔵である。



図1 新羅時代の寺院の屋根の軒丸瓦



図2 皇龍寺出土



図3 725年に造成された上院寺の梵鐘。笙(笙)と笙箇を演奏する天人が刻まれている。

韓国最古（725年）の梵鐘（ぼんきょう）で、天人が雲に乗り笙（又は笙）と笙箇（さくし）を演奏している優雅な姿が上院寺の梵鐘に刻まれている（図3）。この梵鐘は725年に造成されたもので、現存する韓国の鐘の中で最も古く最も美しい鐘で、韓国では特に有名である。



新羅文化遺産研究院
学術研究長 金聖恵氏



図4 「癸酉銘石像」の側面に笙を演奏する彫刻がある

673年に製作されたことが分かっている
「癸酉銘石像」(図4)。長方形で四面石であり、各面には、隙間なく彫刻されている。前面の中央には、如来坐像を含む七尊像が表現されており、後面には20の佛像が刻まれている。そして両側面にそれぞれ奏楽像4つず

笙演奏の彫刻

673年癸酉銘石像

これらの丸瓦、梵鐘、石像の他にも、古代の寺院の屋根瓦の遺物に笙と短簫（短い管楽器の一つで、尺八の一種の縦笛）との2管による合奏の様子が彫刻されていることが明らかになった。

図6 石像の側面の拡大図、蓮花臺座の上に座り笙を演奏する像（左）。右は、琵琶を演奏する様に見える



笙と箜篌を演奏する天人が彫刻されている
上院寺の梵鐘 725年製造

一つの計8つが刻まれている(図5)。奏楽像の一つが笙の演奏の像である(図6)。

皇龍寺址から出土の瓦
迦陵頻伽が笙を演奏する丸瓦の出土した皇
龍寺からは、図7の瓦も出土している。

図7は、瓦の
拓本なので模様
が鮮明ではない
が、瓦の上下の
部分は玉模様が
一列に配されて
左側の天人は、
両手で二本の棒

厚さ2cm。これは右側が欠落しているが、図7での拓本には現れなかつた笙の吹口の部分が鮮明に現れている点が際立つてゐる。右側に向かう天人は、複数の管が刺さつてゐる笙を両手で挟み込むように持ち、笙の吹口が天人の口につながつてゐる曲線が明確に残つてゐる。したがつてこの瓦の天人は、両手で挟み持つてゐるのが笙であることを確認するこ



図8 笔の歌口部分が鮮明に現れている『新羅瓦伝達』

図9は、高仙寺から直接発掘された瓦であるところに意味がある。この瓦も上と下は玉模様で装飾され、雲模様を間ににおいて天人が

向かい合い、管樂器を演奏する姿である。皇龍寺（図7）の瓦と模様が同じである。

笙を演奏する天人の姿の瓦である。

四天王寺から出土の瓦

図10は、679年に唐の侵略を防ぐために現慶州市に建てられた四天王寺址から出土した瓦である。この瓦も右側が欠損しているが



図10 四天王寺から出土の瓦
『日本所在文化財図録』



図9 高仙寺から出土の瓦
『高仙寺址発掘調査報告書』

向かい合い、管樂器を演奏する姿である。皇龍寺（図7）の瓦と模様が同じである。

図11は、図8の高仙寺の瓦と非常に似ている。この瓦は出土地が明らかではないが、慶州の寺院で使われていた瓦である可能性が高い。この瓦も笙の吹口の部分が鮮明に現れている。



図11 笙の口が鮮明に現れている瓦 出土地は不明
ユ・チャンジョン氏寄贈

図11は、図8の高仙寺の瓦と非常に似ている。この瓦は出土地が明らかではないが、慶州の寺院で使われていた瓦である可能性が高い。この瓦も笙の吹口の部分が鮮明に現れている。

高龍寺は、九重塔を持つ国家的大寺院で

四天王寺から出土の瓦

出土したのは慶州近郊の寺院

これら笙と短簫の模様が描かれた屋根瓦が発見されたのは、すべて慶州近郊の寺院で、ここに掲載した高龍寺、高仙寺、四天王寺の他、昌林寺、普門寺からも同様の模様のある瓦が出土し、現在把握できているものは15点ある。

高龍寺は、九重塔を持つ国家的大寺院で

出土したのは慶州近郊の寺院

これら笙と短簫の模様が描かれた屋根瓦が発見されたのは、すべて慶州近郊の寺院で、ここに掲載した高龍寺、高仙寺、四天王寺の他、昌林寺、普門寺からも同様の模様のある瓦が出土し、現在把握できているものは15点ある。

高句麗、百濟、新羅の時代の笙と竽

韓半島での笙の文献記録を簡単に整理してみると以下のようにになる。

高句麗（紀元前37年頃、建国）は、笙が使われていたことが『通典』『三国史記』に記されている。

また百濟（346年建国）は、笙（笙と構造は同じで、笙より大きく低音のできるのが良洞村）もユネスコの世界遺産に登録されている。慶州市は、3件の世界遺産が存在し、世界の中でも稀な世界遺産都市である。また慶州市は、慶州の景観を守るためにホテルなどの高層建物は、郊外に建設している



新羅（356年建国）は、500年頃には天上郁皆子という人が作った「竽引」という樂曲があつたというから新羅（統一する前の新羅）では、竽を使つた可能性がある。

高句麗、百濟、新羅では、同じ時代に笙と竽が使われていたことになる。

さらに高句麗、百濟、新羅の三国が新羅に統一（676年）されてからも笙は、新羅人が愛好した管樂器の中の一つであり、歌伴奏にも演奏された可能性があることが『三国遺事』などに記されている。

これらのことは、日本の時代では東大寺大仏の建立（752年）の前のことである。

韓半島では7~9世紀に笙の演奏と短簫との合奏も行われていたことがわかった。

（翻訳・山本華子、李元淑）

（編集部注・この原稿は、金聖恵氏が『韓國音楽史學報』51号（2013年12月、発行韓國音樂史學會）に発表された「笙簫竝奏型演奏の淵源に対する研究」の中から、笙に関する部分を書き直していただいたものです。

なお、慶州は、古代の新羅の都・金城で、現在も古代の遺跡が多数保存され、「石窟庵」と「仏國寺」そして伝統的民俗村である「良洞村」もユネスコの世界遺産に登録されている。慶州市は、3件の世界遺産が存在し、世界の中でも稀な世界遺産都市である。また慶州市は、慶州の景観を守るためにホテルなどの高層建物は、郊外に建設している

「調子・入調」演奏会

プログラムより

宮田まゆみ

平成18年（2006年）7月8日、国立劇場第60回雅楽公演「管絃・失われた伝承を求めて」において、鴨長明・秘曲づくしからの音楽が取り上げられ、私はその公演で豊原家（農家）伝来の秘曲「太食調入調」を演奏するという大変光栄な機会をいただきました。

「太食調入調」は現在の雅楽では演奏されなくなってしまった曲で、譜面は江戸時代に書写されたものが残っていますが、いつまで実際に演奏されていたのかがわかりません。国立劇場公演の時には遠藤徹氏（東京学芸大学准教授）が、東北大附属図書館狩野文庫に伝わる江戸後期に書写された譜から復曲されました。遠藤さんとともに試演をしていくうちに、次第にくつきりとした旋律線が浮かび上がりました。

「入調」の曲全体の構成は現在演奏されている「調子」と大体共通しています。多少例外はありますが、現行の「調子」の「句」には「句」の区切りが記されていません（区切らなければ、それぞれの運びの骨組みが

かなり一致し、各句の長さのバランスも「調子」と「入調」とで相似形です。

「調子」と「入調」の大きな違いは「調子」が「合竹」という六音、または五音の和音が諸處に配され華やかな響きを感じさせるのに対し、「入調」では「合竹」という記載はひとつもなく、ところどころに二音か三音の重なりをまじえながら、飾り気の無い旋律線にいくつかの音がからまっています。

現行の「調子」は私にとって、世界中の数多の音楽の中でも特別魅力的な存在ですが、復曲された「入調」もまた不思議な美しさをたたえた音楽でした。

国立劇場で演奏させていただいた「太食調入調」の美しさにいざなわれ、太食調以外の調も復曲されていた遠藤さんの監修のもとで公演後も平調、雙調、黄鐘調、太食調、盤渉調、壹越調の六つの調の「入調」の試演をかさねるようになりました。

試演は平成18年から19年にかけて数回行いしばらく途絶えて平成25（2013）年末に再開したのち平成26年10月までに20数回行いました。古譜を読むのは時間がかかります。一旦わかつてしまえば「何だ、こんなことだつたのか」と思われる奏法もたくさんあります。ですが、古譜では略されている記譜も多く、想像するしかない箇所もたくさんあります。試演する私は現行の奏法に慣れてしまっているので、なるべくそれを白紙に戻して古譜に向かうようにつとめました。ひとつ箇所に考

えられるかぎりの奏法を試して、また全体の中でつなげてみると、やがてこれではないかと思えるものが見つかってきます。それでも本当にこれだろうか、もっとほかに考えられないだろうか、と、ほんの数秒の旋律に行ったり来たりです。あれこれ試してこれだ、と思える旋律の流れが見つかったときは何にも代え難い喜びを感じます。時に清らかな美しい旋律が立ち現れたり、時には鳥の囁きのように聞こえたり。

「秘説」とされる部分にはちょっと迷いを感じているところもあります。なぜか関係の旋律が挿入されていてあまり流れがよくない気がするところがあるのですが、自分の先入観にとらわれて違った方向に行つてはいけないので、極力譜面そのものから読み取れることを音にする、ということを心がけました。今回は疑問の箇所も含めて演奏してみようと思っています。

「入調」の試演をはじめたことで私にとって演奏の可能性が大きく広がってきました。今回は現行「調子」と古譜の「鳳笙調律呂巻」および「鳳笙調律呂巻」の「入調」を対に演奏しますが、次の機会には上記古譜記載の「調子」「入調」を対にした組み合わせの演奏もしてみたいと思います。また興味深い陽明文庫所蔵調子譜の演奏もそれに続けて計画しているので、思っています。

まだまだ演奏の解釈は決定稿とはいえず、ひとつの途中経過ですが、ぜひ皆さんにご教示、ご指導いただけましたらうれしく思います。私は雅楽を愛する一介の笙奏者にすぎませんが、このような音楽を作り、守り伝えたくなりませんでしたが、幸運にもこの古譜を試演することが「入調」の演奏法を探る大きな手がかりとなりはじめました。また同時に体源鈔の調子譜、狩野文庫所蔵の調子譜、宮内庁書陵部所蔵の調子譜なども比較をしてみました。どちらかに異なる調子の記譜が現れびっくりしました。現行の「調子」は定番ひと種類ですが、古譜を見るとその豊かな多様性におどろかされます。昔の人々の柔軟で色彩に満ちた音楽性にあらためて感動しました。昔の人はどのような機会に、どのような気持ちで、どのように感じて「調子」や「入調」を演奏していたのでしょうか。





右奥の建物の中に舞楽舞台がある。この門は「春日山雅楽御堂」
創建の願主・大悲院恵契法尼の縁由となる「大悲院門」



玄関口ビーに飾られている生、簾、龍笛の彫像



常設の舞楽舞台。左右に大太鼓、大鉦鼓が据えられている

「今見ていただいたのは、ほんの一部ですね。この舞台は舞台の下に仕掛けがありまして、エアーで簡単に動くようになっています。お寺の行事などで舞台を移動させたいときは数人で動かすことが出来ます。また、

雅楽舞台を常設している九州の筑紫楽所をお訊ねいろいろとお話を伺おうと、お盆を過ぎて九州に向かいました。

博多駅より南に車で20分ほどのところに、春日山雅楽御堂がある。広い駐車場を抜けると大きな門があり、「春日山雅楽御堂」の額がかけられている。

玄関を入れると笙、簾、笛を吹く天女の大きな彫像が掛けられ、奥に進むと、作りも大きさも、ほぼ宮内庁楽部と同じという常設の

雅楽舞台を目の当たりにする。もちろん左右には大太鼓、大鉦鼓が据えられている。

これだけで驚いてはいられない。舞台の奥（幕の向こう側）には板張りで40畳の鏡のある練習室がある。四間四方が取れて舞の練習に使われるという。さらに鏡の間の2階には、20畳ある和室が2部屋、笙、笛の練習室。さらに簾の練習室は36畳あり、ここも四間四方が取れて、合奏練習もできる広くなっている。

常設の雅楽舞台 九州

筑紫楽所を訪ねて

筑紫楽所楽長・大賀信一郎氏、副楽長・梶原知之氏はじめ、前楽長や会員の方々にお忙しい中いろいろと教えていただきました。

○九州で雅楽の専用の舞台を持つ筑紫楽所が活動されているということは以前から伺つておりました。いつかはお訊ねし、お話を伺いたいと思っておりました。



筑紫楽所楽長 大賀信一郎氏(左) 副楽長 梶原知之氏(右)

音響も2003年に改良工事を行いました、丁度良い音響にいたしました。又装束や面、この舞台が出来る前から使用していました舞台や高欄などは、二日市の正行寺に雅楽専用の蔵があり保管しております。

さらにこの雅楽御堂の隣には筑紫樂所樂寮（鍊成道場）がありまして、そこでは住人諸氏が聞法と雅楽研鑽の共同生活を営んでいます。

○本当に設備が充実していますね。雅楽専用の舞台があるだけでなく、練習のお部屋、高欄や装束の専用の保管場所まで整っているとは思つていませんでした。

このようすばらしい雅楽舞台を作られたいきさつなどを教えていただけませんか。

雅楽御堂 完成

1989(平成元)年に完成

「この春日市にわが国で初めて雅楽法要の御堂春日山雅楽御堂が完成したのは25年前、平成元(1989)年です。

この正行寺の雅楽については、戦前の話から始めなくてはなりません。正行寺の第十三世住職・竹原嶺音法師は、雅楽を人類究極至高の道である「和」の響きを伝える、唯一無二の宗教音楽として、雅楽の保全と復興に关心され、平和への悲願から戦火の中、雅楽器一式を購入しました。これは聖徳太子の「三宝を供養するに、蕃樂をもつてせよ」との教えに起源します。雅楽は世界史上最も長い伝統を持つ莊重、かつ華麗な音楽藝術です。

そして大陸、半島の文化、わけても仏教文化受容の窓口であった筑紫の国において雅楽法要勤式が行われる専用堂宇が、当地に実現されることには久しい間の念願がありました。

これが雅楽御堂建立までのおおまかな経過ですね。

舞台正面に阿弥陀如来立像

○舞台の正面に阿弥陀如来立像がございます

正行寺樂部から

筑紫樂所へ

昭和32(1957)年に正行寺樂部が発足します。この時には舞楽6曲を舞えるようになっています。この頃は、名古屋の羽塚堅子師より指導を受けていました。その後、舞樂奉納の充実にともない右方の大太鼓と大鉦鼓を昭和50(1975)年に購入しました。10年後の昭和60(1985)年に装束や舞台、高欄などを収納する雅楽藏を建てまして、この年より東京より先生方にお越しいただき、管と舞の指導を受けるようになりました。そ

の2年後の昭和62(1987)年に「筑紫樂所」として発足しました。

さらにその2年後、平成元(1989)年にこの春日山雅楽御堂が完成します。

そこでここ雅楽堂では1月 修正会、3月 春の彼岸会、4月 永代経、8月 盆灯会、9月 秋の彼岸会、10月 御取越、11月 報恩講、12月 除夜などに雅楽の演奏や舞楽などを奉納します。それぞれの行事のとき参会者は仏様に向かい座られて、奉納舞楽になります向いを変えてお座りいただき、舞楽などをご覧いただきます。

会員100名 贊助会員300名

○筑紫樂所の会員の方は、何名ほどおられるのですか。

「会員として100名ほどおります。この中には、演奏する人はもちろんですが、舞のみの方、迦陵頻、胡蝶を舞う子供たちも多数おります。子供たちの本番の機会をどのように作つてあげようかと考えてしまふぐらい大勢おります。演奏する方々は30代、40代の会員が多いですね。ほかの雅楽会の方からは、「筑紫樂所は若い人が多いですね」とよく言われます。また会員の中には、演奏しないが、装束の着装を手伝ってくれる方、装束を管理してくださる方、裏方を担つていただける方々もおります。

その他に、賛助会員の方が300名おります。装束を購入するにも膨大な費用が必要と



御本尊 阿弥陀如来立像、御身丈4尺
御厨子 総高さ 15尺5寸 写真の手前に舞楽舞台がある。



舞台の正面に仏様。舞台後方より

雅楽御堂の完成に合わせて、1989年の4月に左方の大太鼓と大鉦鼓も購入し、左右の大太鼓、大鉦鼓が舞台の横に据えられました。

5月に春日山雅楽御堂落慶舞楽法要が厳修され、安倍季昌先生始め九人の先生方にお越しへ頂き、筑紫樂所の会員と一緒に振鉢三節、迦陵頻、胡蝶、仁和樂、蘭陵王などを奏楽させて頂きました。

雅楽御堂 落慶舞楽法要



舞台で管絃の合奏練習

なります。それを支えてくださっているのが贊助会員の方々です。この方々が30年余支えて下つてるので、装束も揃つてまいりました。

練習は水曜、土曜 夜8時から

練習日は毎週水曜、土曜の夜8時からで、毎月の会費は5000円です。

その他、年に数回、安倍季昌先生、多忠輝先生、上研二先生、小原完基先生にお越し頂いて、お稽古して頂いています。」

○これだけの雅楽堂を維持管理していくのは大変ではないですか。

「そうですね。ご覧のとおりここはお寺ですのでお坊さんが住んでおられます。その他にもこの御堂を維持管理するために数家族の方々が住まわれています。」

○海外公演も多いのですね。

「20年ほど前、平成5（1993）年にイ

ギリス、ロンドン大学での日英交流記念碑除幕式で演奏しています。これは筑紫楽所の会員の方がロンドン大学の学長さんなどと懇意になりましたし、日英交流の記念碑の除幕式に雅楽を演奏してくれないかということで実現したものでした。

雅楽は「異質の調和」「宮商和す」

この公演に至る中で、次のような話が伝えられています。ロンドン大学の学長さんが、「貴方が生命としている雅楽とは何ですか」と会員に訪ねたそうです。会員は、「それは異質の調和です。宮商和すで、普通考えると調和しないと思われている宮音と商音が、雅楽では和して演奏されます。」と応え、これを聞

いた学長は、ロンドン大学で掲げている理念と同じですねと感銘され、「除幕式の演奏を雅楽で」ということで頼まれたのです。

この日英交流記念碑は、今から150年前の幕末、長州藩から5名、続いて薩摩藩から19名の若き志士たちが海外渡航の禁じられた当時、国禁を犯して渡英し、ロンドン大学の校であるUCLで学んだことを讃えて建てられたもので、留学生24名の名前が刻まれています。

舞台の裏にある鏡の間。鏡の左右の出入り口は、舞台への舞人の出入り口でもある。本番の時の舞人の装束着装の部屋でもあり、舞の練習部屋で40畳（四間四方以上）ある。



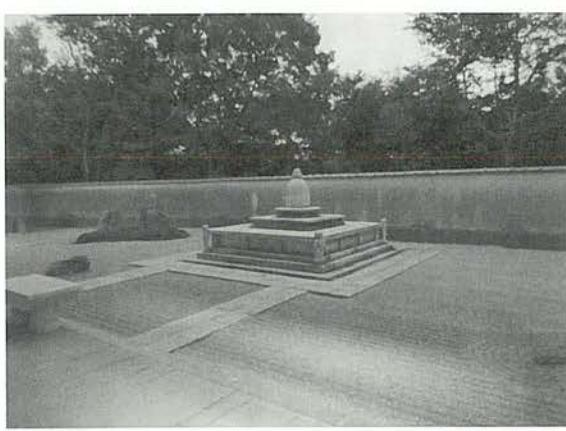
中国 北京中央音楽院

韓国 仏教寺院などと交流

ロンドン大学との交流の後、近いところでの交流もということで、中国や韓国との交流もおこなわれています。中国とは北京中央音楽院との交流がありました。また、韓国とは李退渙先生のご子孫と、或いは韓国の佛教寺院との交流も続いている。



「李退渙先生顕彰碑」
李氏朝鮮の時代の儒者の碑が玄関横に建てられて
いる



舞台横の石庭には韓国の寺院との交流による仏舍利塔がある。

雅楽御堂の庭を拝見すると、石庭になつていて、韓国の寺院との交流によって庭の中央になりました。この雅楽御堂と筑紫楽所を支えておられます正行寺のご住職を始め、僧侶の方々、そして門信徒の方々の幾世代にもつながる歴史の中での雅楽への熱い想いをとても強く感じました。

お忙しい中、案内していただきたり説明していただいたりと、とても印象に残る取材でした。そして、たくさんの事を学ばせていただきました。ありがとうございました。

（鈴木治夫）

雅楽いろいろQ & A(11)

復曲の方法

芝 祐靖

Q-11

先生は多くの曲を復曲されておりますが、復曲の方針などはあるのでしょうか。またどのように復曲されても違うかもしれませんのが、いつも不思議に思っていますので質問させていただきました。

A-11

広辞苑を見てみると、復興、復活、復元、復縁、復学はあるものの復楽、復曲はありません。古い楽曲を再興するのに、つい使ってしまいました造語?です。

私の場合の「復曲」は、ほとんど古い笛譜に記された本譜(笛の指穴譜)をカナ譜(明治撰定譜の笛譜)に書き直す作業時に用います。原譜は「長竹譜(源博雅966年頃)」「懐中譜(大神惟季1095年頃)」「龍鳴抄(大神惟季1130年頃)」などです。また敦煌琵琶譜(中国唐代楽譜)を用いて、復元・正倉院樂器(15種)合奏のために五線譜化した楽曲にも「復曲」を用いています。

もう一つ「補曲」と名付けた作業もあります。廃絶催馬樂や梁塵秘抄の今様など、昔日はメロディーがあつて歌われていたものが、今日では歌詞のみの伝承となっています。その歌詞にそれらしい旋律を付する作業を「補曲」としています。伎楽曲(10演技19曲)はまったく手掛かりがないので「作曲」としています。

前置きが長くなりましたが、「復曲」をする

樂曲を選ぶこと、また樂譜化する手段を(一曲選んで)簡潔に記しましょう。

選曲

廃絶曲の復曲は1978年ころから始まつて30曲ほど手掛けましたが、その殆どが国立劇場で選曲しておりますので、自分から選曲したもののは5曲程度です。

採譜

1979年源博雅記譜の「長竹譜」から、盤渉参軍の復曲を頼されました。

この楽が属している雅樂の調子は盤渉調です。

まず、博雅記譜(写本)の龍笛指穴譜を書き出し、旋律の区切り(息継ぎ所)を探ります。そして、小節点を置き太鼓の位置を付します。

次に最も重要な「カナ文字付け」の作業となります。カナ文字付作業は、現行の盤渉調で用いられている旋律とカナ文字の関係を精査して、盤渉曲に不都合なものを用いないよう注意し、また唱歌に不都合なものも書き改めます。

盤渉参軍(序13帖、破10帖)の各帖は拍子12ですので、唱歌を歌いながら、早八拍子の場合は12行、延八拍子の場合は24行に仕上げます。

総譜

笛譜が納得してから、笙を付し、簾篥(力譜)を付し、琵琶、箏と記しますが、他の盤渉雅樂曲を参考として、ユニゾン(同一

旋律)の部分とヘテロフォニー(雅樂器の特性を活かした旋律の変容)のところを作り上げます。この変容の出来次第で、雅樂曲の流れが良くも悪くもあり、緊張するところです。

試演

盤渉参軍を復曲した時の私は雅樂経験の浅い若造(44歳)で序13帖、破10帖を3年がかりで復曲し、試演をしてもらつたものの樂師からメチャクチャにクレームがつき、なんと

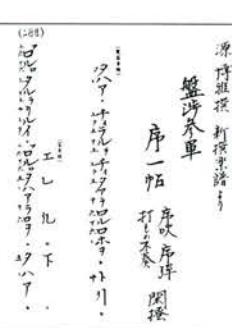
か楽曲らしくなったのは1年後でした。

最近は?

盤渉参軍のあと、懲りもせず鳥歌萬歳樂(ちよよかまんざいらく)、玉樹後庭樂(ぎょくじごとうがく)、大菩薩(だいぼさつ)、曹妃尊(そうひしゆん)、廻忌(まわき)、安城(あんじゆ)、樂と続きましたが、旨くカナ譜が付いた時は嬉しいものです。

ちよつと困るのは同名曲の笛譜、筆篥譜、琵琶譜が現れることです。年代差、伝承場所(樂所)の違いなどで、総譜として書き合われても全く異曲が現れてしまします。昨年の「団乱旋(どらでんせん)」の時にそのような状況となりましたので、笛譜(岡昌倫の龍笛樞要錄)一冊に絞り、筆篥の退吹(おめりぶき)や的々(てきてき)拍子などを加えました。

私は一介の笛吹きですので、学究に縛られず、演奏して楽しく、聞いて楽しい音楽を目指していきたいと思っています。



復曲した盤渉参軍の総合譜
『遠樂の復曲』より

古楽譜・古楽書でたどる

『體源鈔』とその時代(9)
雅樂の歴史(17)

東京学芸大学准教授 遠藤徹
秘曲の特殊な譜字

笙の十七本の竹の名はご承知の通り、千、下、乙、工、美、一、八、也(簾なし)、言、七、行、上、丸、乞、毛(簾なし)、比です。樂曲は合竹で演奏しますので、これらの中から、乞、一、工、丸、乙、下、十、美、行、比が使用され、これらを基音にした和音名を表すことになります。しかし「調子」等では一竹のみで奏する箇所をはじめ、もっと複雑な手が現れますので、これらの竹名は、簾の無い也、毛を除いて、全てが用いられています。笙の竹の名称の起源は不明ですが、敦煌琵琶譜などに通じる琵琶の譜字とほぼ一致することから、唐代中国で使用されていたいます。笙の竹の名称の起源は不明ですが、もちろんこれらの竹名が明記されています。さて、中世には一部の人にしか伝授しない秘事秘伝が生じ、足柄山の伝説で知られる、「太食調入調」や「平調入調」などの秘曲では譜字を敢えて別の字に変えて樂譜に記すこともありました。実際、「入調」を載せた樂譜にはこうした特殊な譜字の使用例が見られます。そして「體源鈔」の時代になると、こうした特殊な譜字を口伝のみで伝えることが難しくなったためか、豊原統秋は「體源鈔」卷一に「一秘事案譜事」として次のような秘事用の十七の譜字を掲げ、通常の譜字との対応関係を注記しています。

月、合、石、走、口、白、免、金、耳、手、貝、久、水、木、勿、王、反

例えば、「月」には「千／前」「走」には「乙／越」、「金」には「八／鉢」などのように当該譜字の下に小字で簡単な注記を施しています。「月」は「前」の旁(つくり)の一部をとつたもので、「前」と「千」は読みが「せん」で通用するので、「月」は「千」の代用「走」は「越」の部首である「走(そうによう)」をとつたもので、「越」と「乙」は読みが通用するので、「越」は「乙」の代用「金」は「鉢」の部首である「金(かねへん)」をとつたもので、「鉢」と「八」は読みが通用し、「鉢」は「八」の代用、といった意味でしょう。こうした解説法は十七の譜字すべてに記されています。

秘事用の譜字を実際に使用した例は、管見の及んだ範囲では中世の「入調」の楽譜のみです。「入調」では曲の後半の一部分に上記の特殊な譜字が使用される例があります(「入調」は古くは、六調子のすべてにありましたが、特殊な譜字が確認されるのは秘曲とされた太食調、平調と盤済調、双調の四調子)。したがって解説法を知らなければ、たとえ楽譜を手に入れたとしても、これらは全曲を通して演奏することはできません。

案譜法を記した文献は、管見ではこの『體源鈔』卷一の「秘事案譜事」のみです。そのため現在、笙奏者の宮田まゆみさんと共に進めている「入調」の復元にあたつても、この『體源鈔』の記述を参考にしています。しかし実際に音にしてみると、どうもしつくりこないところもあります。先の解説法は、分かつてみると案外簡単なものですので、もしかすると『體源鈔』には明記しなかつたもう一段奥の秘事があつたのかも知れず、秘事案譜は一筋縄ではないようです。

現代語訳『樂家錄』(2)

監修 東京学芸大学准教授 遠藤 徹

第十三 三管總論

(P 457)

第四 金の拍子の説(略)

(P 459)

第五 拍子と拍子の文には差異がある

(P 460)

第六 諸曲の拍子の位の法(略)

(P 460)

第七 三管の名の説

(P 464)

第八 古くは三管とも袋を用いない事

(P 460)
管と呼ぶのは、吹き物をいう。笙、簞篥、笛の三つである。故に三管という。(管、和訓は不伎毛乃「ふきもの」)

古くは、三管とも袋を用いない。清涼殿の御厨子棚に置かれた楽器三管は同じ笛管(箱)に納めてある。この天皇の御世になつてから樂器を重んじて袋を設けたのか。今世はまた晴れの御遊では袋を用いない。笙は左の袖に指(差)を入れ、笛、簞篥は箱を用いるのみである。これもまた、中古の遺法かもしない。

第九 三管を持つて進退する方法

(P 465)

旧記に曰く「御遊のとき、管(管樂器)を公卿(太政大臣、左右大臣、大中納言、參議、三位以上等の朝官)に進める方法は、三管とともに笛管に納め、六位の藏人がこれを持ちて上首(最上位の者)に進める。」云々(笛の箱の図は「旧例の巻」にある。最も袋は無い)私に曰く「ちかごろは、笛の箱は用いられずはない」云々

考るに、右の方法は、これを用いるのがよいが、とはいえば必ずしもこれにこだわらず心の中で理解していれば良いのではないか。

案譜法を記した文献は、管見ではこの『體源鈔』卷一の「秘事案譜事」のみです。そのため現在、笙奏者の宮田まゆみさんと共に進めている「入調」の復元にあたつても、この『體源鈔』の記述を参考にしています。しかし実際に音にしてみると、どうもしつくりこないところもあります。先の解説法は、分かつてみると案外簡単なものですので、もしかすると『體源鈔』には明記しなかつたもう一段奥の秘事があつたのかも知れず、秘事案譜は一筋縄ではないようです。

「林邑樂ベトナム・フエ里帰り公演」
南都樂所 楽師 藤岡信宏

舌の方を、それぞれ左とし、管の半ばを持ちそして少しすえの方を下げて持つ。但し、笙の吹き口を前方とし、笛と簞篥は共に管の孔を上とする。そして演奏する人に向かい、跪き、取り直し置く。持つて退く方法は、難しいことはなく、これを取り、最初のように取り直して退く。

第十 奏樂のときの着座の方法(P 465)

樂を奏するときは、高貴な方の前であつても、必ず安座をするのを決まりとする。心を安らかにするためか。御遊のときも同じである。今、樂師の着座を見ると、左右の足先を屈曲し座るので片膝が脛に付かない。この形は正しくない。浅く足先を交え両膝を畳に付けさせるべきである。このようにすると形も正しくなる。その方法は、浅く足を交え、左右の踝(くるぶし)を合わせて座る。そうして左右の足先を離れている間は、六、七寸許(約二十七センチ)にし、左右の足先と膝を平らにする。そして袴の裔(すそ)で足先を包んで座る。(管の職は衣の裾や袖などは長いものを着るべきである。管を奏するとき、袖が短いとみばえが宜しくない) 箏を弾く人は足に載せて弾く。故に足先が出て膝と平らにならないのか

南都樂所は本年4月12日～21日の10日間に亘りベトナム中部の古都フエ市において開催されたフエ・フェスティバル2014に招聘され、「林邑樂ベトナム・フエ里帰り公演」を花山院弘匡会長・笠置侃一樂頭以下22名の樂人で行つた。

フエ・フェスティバルとは、隔年に一度開催される国家的國際觀光事業で、世界各地から音樂・芸能者が集い、交流し、世界に發信する芸術と文化的一大催事で、昨年9月横浜能樂堂特別企画「再びの出会い」二つの国の大雅樂」にベトナム宮廷藝術劇場付属雅樂團の雅樂演奏と南都樂所とが彼地の雅樂と南都の舞樂「陪臚」「胡飲酒」の演奏をもつて競演した際、雅樂團團長でフエ人民委員会副議長兼フエ・フェスティバル実行委員長ノウ・ホア氏より招聘を受け実現したものである。

4月13日に旧グエン朝の王宮にあるベトナム宮廷藝術劇場で管絃(壇上調音取)、「迦陵頻の急」、舞樂「陪臚」「胡飲酒」を公演。この公演が今回海外公演の中心となるもので、約300名の觀衆はたいへん興味深そうにご覧になつていた。

14日には、フエ芸術大學でワーキショップや前日同様の管絃・舞樂演奏を行い、また樂器体験や質疑応答等を通じ、約100名の熱心な学生や学校関係者と交流した。

15日、ダナン市郊外の仏哲が生まれたといわれる旧チャヤンパ王國ミー・ソン遺跡で彼を偲び管絃「太食調音取」「拔頭」舞樂「蘭陵王」を奉納した。ミー・ソン遺跡管理委員会の熱烈な歓迎を受け、仏哲が苦難の末に日本に伝えた林邑樂をその故地で演奏が叶つたことは、花山院会長以下樂人皆の感慨も一入であつた。

16日はフエ国立高校で、18日はフエ外國語大學においてワークショップと管絃「迦陵頻

急」「拔頭」を演奏し交流を図るとともに19



ミーソン遺跡演舞場で

日には、ASEANアートフェスティバルが催され、各国大臣列席のもと日本を代表して

管絃「拔頭」の演奏を行った。

今回の出向に際し、花山院会長は奈良県の荒井正吾知事よりフエ省の知事にあたるトウアティン人民委員会委員長あてに今後の様々な分野での友好を一層深めたい旨記された親書を託され、公邸において和やかなムードのなか無事にその任を果たした。

雅楽の中でも「林邑樂」は、その源も伝えられた人も明確であり、奈良の地で伝えられて、1300年近い歴史を持つ林邑樂を「里帰り公演」として行う意義は大きい。おそらく日本伝統ある雅楽団体としては初めて、当地でフ工を始めベトナムそして世界の方々に鑑賞され、雅楽の歴史と伝統に思いを馳せていたいたることは、ベトナムと日本の友好を更に深めるひとつの契機になつたのではないかと思つてゐる。

文化厅 和琴・箏の製作修理の選定保存技術保持者

小川眞紀夫氏を認定へ

文化庁は今年7月、重要無形文化財の「雅樂」の上演に不可欠な箏、和琴の製作修理の技術を後世に伝えていく技術として選定し、その技術保持者として小川眞紀夫氏（61歳）の答申を受け10月に認定する。

小川氏は、明治40年より、箏の製作修理を営む、小川樂器店（東京、本郷）の長男とし、昭和28（1953）年に生まれ、1975

年より家業に専念し、材料の確保から胴および、各種部材の製作、螺鈿などの装飾、琴柱や琴軋、爪の製作まで一貫し

て製作する技術を習得し、宮内庁の和琴・箏の修理と調律を担当する。

選定保存技術保持者と当してからは、36年間続き現在に至っている。

全国の雅楽演奏団体からの依頼も多い。

技術保持者に選ばれたことについて小川氏は、「この選定は、後継者を育てるこども大事なことのようです。私は現在2人を後継者として育てています。昨年は伊勢神宮の新しい

「鳶尾の御琴」の絃を張るのを頼まれ、弟子の一人を連れて出かけました。絃は昔の方法で止めてあります。弟子がこの仕事をするのは20年後のことになるのでしょうか」と、弟子

（「雅楽だより」23号に取材記事掲載）の養成についても抱負を語られた。

なお、現在雅楽の関係の選定保存技術の保持者は、箏、琵琶、和琴などの絃を製作している、邦楽器系製作の小篠洋之氏（「雅楽だより」11号に取材記事掲載）と、雅楽管樂器製作修理の山田全一（山田頼全）氏、八幡運昌（八幡内匠）氏です。

前号に掲載できなかつた演奏会など

○安齋省吾の領域（笛と歌）（名古屋）

名古屋能楽堂 稲古室
庭火 高麗管絃 白濱 嘉辰

蘭陵王 一具

9月14日（日）午後1時30分

○正行寺雅楽御堂秋季彼岸会法要（福岡）
出演 主観会

9月23日（秋分の日）午前10時

全自由4500円
二公演セット券8000円

勤行・法話に続き 演奏 第紫樂所
迦陵頻 胡蝶 桃李花

秋う冬までの主な雅楽演奏会など

全道 雅楽のつどい（北海道）

10月2日（木）午後6時 1000円

札幌コンサートホールキタラ小ホール

管絃 双調 音取 酒胡子 賀殿急

舞楽 蘭陵王 納曾利 長慶子 ほか

主催 北海道神宮

問合せ Tel 011-611-0261

北陸地区ロータリークラブ大会（富山）

10月5日（日）午後1時 無料

高岡市民会館 舞楽 萬歳樂 演奏 洋遊会

問合せ Tel 0766-64-2038

赤間神宮 管絃と舞楽の夕べ（山口）

10月6日（月）午後6時半 1000円

舞楽 陵王 拔頭ほか 演奏 赤間神宮雅楽部

問合せ Tel 083-231-4138

今宮神社 秋の大祭（京都）

10月8日（水）午後7時 前夕神事 御神樂

9日（木）午前10時 東遊 演奏 平安雅楽会

10月9日（木）午後1時より 舞楽 延喜樂 蘭陵王 拔頭（右）

問合せ Tel 075-491-0082

下鴨神社 大国祭（京都）

10月9日（木）午後1時より 舞楽 延喜樂 蘭陵王 拔頭（右）

問合せ Tel 075-491-0082

沙沙貴神社近江源氏祭（滋賀）

10月12日（日）午前10時30分 曲目 春庭花 出演 女人舞樂原笙会

問合せ Tel 0797-23-1886

宮田まゆみ 笙 独奏

演奏 平安雅楽会

チケットプレゼント有り

四天王寺 経供養舞楽（大阪）

10月22日（水）午後1時 舞楽 振鉾 蘇利古 萬歳樂 還城樂

演奏 天王寺樂所雅亮会

問合せ Tel 06-6641-0084

神奈川雅楽部第18回演奏会（神奈川）

10月22日（水）午後7時 1500円
かなづくホール（JR東神奈川駅徒歩1分）

サントリーホール・ブルーローズ
10月13日（月・祝）午後2時
平調 雙調 盤渉調 壱越調の調子と入調
12月7日（日）午後2時
太食調 雙調 黄鐘調の調子と入調
問合せ Tel 03-3560-3010

乃木神社 管絃祭（東京）

10月14日（火）午後6時
管絃 双調 音取 酒胡子 賀殿急

舞楽 蘭陵王 納曾利 長慶子 ほか

主催 北海道神宮

問合せ Tel 011-611-0261

赤間神宮 管絃と舞楽の夕べ（山口）

10月15日（水）夕方より 菊花祭典に引き続ぎ舞楽 振鉾三節 萬歳樂 延喜樂 一曲

舞楽 桃李花 貴徳 演奏 雅楽道友会

問合せ Tel 03-3783-2371

厳島神社 菊花祭（広島）

10月15日（水）夕方より 菊花祭典に引き

続ぎ舞楽 振鉾三節 萬歳樂 延喜樂 一曲

舞楽 桃李花 貴徳 演奏 雅楽道友会

問合せ Tel 0829-44-2020

日向大神宮例大祭（京都）

10月16日（木）（外宮）午後2時より

御神樂 早韓神 演奏 平安雅楽会

問合せ Tel 0288-54-0560

日光東照宮 東遊（栃木）

10月17日（金）正午より

例大祭御旅所祭にて東遊

問合せ Tel 0288-54-0560

斎宮行列 野宮神社（京都）

10月19日（日）午後2時より

舞楽 納曾利 演奏 平安雅楽会

問合せ Tel 075-871-1972

四天王寺 経供養舞楽（大阪）

10月22日（水）午後1時 舞楽 振鉾 蘇利古 萬歳樂 還城樂

演奏 天王寺樂所雅亮会

問合せ Tel 06-6641-0084

神奈川雅楽部第18回演奏会（神奈川）

10月22日（水）午後7時 1500円
かなづくホール（JR東神奈川駅徒歩1分）

チケットプレゼント有り

| |
|---|
| 管絃 太食調音取 合歓壇 輪鼓揮脱 舞楽 遷陵頻 央宮樂 還城樂(右) 長慶子 問合せ Tel 045-931-1573 |
| 三翁神社(巖島神社の近く)祭典(広島) 問合せ Tel 0829-44-2020 |
| 宮内厅楽部 秋季雅楽演奏会(東京) 10月24日(金) 25日(土)、26日(日) 各日、午前10時30分、午後2時30分 |
| 皇居 宮内厅式部職楽部 管絃 盤渉調音取 千秋樂 越殿樂 残樂(三返) 剣氣揮脱 舞樂 左方 還城樂 蘇志摩利 申込は締め切っている 問合せ Tel 03-3213-1111 |
| 幻の雅楽 京都方楽家安倍家の伝承(東京) 10月24日(金) 午後6時半 3500円 北とびあ つつじホール 安倍家の古譜より「廻忽」幻の楽曲 胡蝶破 |
| 舞楽 胡蝶 主催 三田徳明雅楽研究会 問合せ Tel 03-3655-8502 |
| 天理大学雅楽部第46回天理公演(奈良) 10月25日(土) 午後6時半 天理市民会館 問合せ Tel 0743-63-4945 |
| 広島公演 2月15日(日) アステールプラザ 第40回東京公演 2月22日(日) 浅草公会堂 流セントラル、詳細は次号に掲載。 |
| 林謙三先生記念国際シンポジウム 第一部 講演会 陳応時・沈冬 第二部 復曲演奏会 双調 柳花苑(仲呂均) 商調(皇帝三台ほか)構成・解説 遠藤徹 演奏 伶楽舎 主催 関西大学 問合せ Tel 06-6368-0653 |
| 四館樂所第7回演奏会(北海道) 10月30日(木) 午後7時 無料 函館市芸術ホール |
| 管絃 平調 舞樂 胡飲酒 ほか 問合せ Tel 0138-41-5467 |
| 明治神宮 舞樂(東京) 11月1日(土) 正午12時 舞楽 還城樂(左) 蘇志摩利 演奏 楽友会 問合せ Tel 03-3379-5511 |
| 古典の日 管絃と舞楽の特別公演(京都) 11月1日(土) 正午12時 京都アスニーホール 管絃 越天樂 陪臯 舞樂 仁和楽 還城樂(左) 演奏 平安雅楽会 問合せ Tel 075-812-7222 |
| 古典の日 雅楽(東京) 11月1日(土) 午後3時 渋谷区文化総合センターハ和田伝承ホール 全席指定3000円 高校生以下1000円 管絃(楽器紹介・レクチャーア付)平調 嘉辰 越天樂 陪臯 舞樂 陵王 貴徳 演奏 雅楽道友会 問合せ Tel 03-3464-3252 |
| 京都御所 一般公開(京都) 11月2日(日) 午前10時、11時 2回公演 舞楽 未定 演奏 平安雅楽会 問合せ Tel 075-871-1972 |
| 正行寺雅楽御堂 報恩講法要(福岡) 11月15日(土) 午前10時 勤行・法話に続き 舞楽 賀殿破 ほか 演奏 筑紫楽所 問合せ Tel 092-596-8585 |
| 東京楽所 雅楽公演(福岡) 11月15日(土) 午後3時 北九州市響ホール 3500円 4000円 管絃 平調音取 越天樂 陪臯 舞楽 万歳樂 落蹲 演奏 東京楽所 問合せ Tel 093-663-6567 |
| 丹生都比売神社正遷宮舞楽(和歌山) 11月16日(日) 午前11時ごろ 舞楽 賀殿急 白浜 演奏 高野山真言宗神 奈川雅楽部 協力 楽中練 問合せ Tel 0736-26-0102 |
| 平安の音色(名古屋) 11月17日(月) 11時30分 1000円 管絃 越殿樂 陪臯残樂 舞樂 右方抜頭他 演奏 主講会 問合せ Tel 052-265-1718 |
| 四天王寺聖靈会の声明(大阪) 11月22日(土) 午後1時 入場無料 四天王寺大学 羽曳野キヤンバス大講堂 講演 四天王寺の聖靈会について 小野真 ラウンドテーブル 司会 |
| 秋の舞樂会 六華苑(三重) 11月8日(土)、9日(日) 午前10時と午後1時 舞樂 振鉢三節(かわらよのぎん) 皇仁庭 打球樂 青海波(波)一具 白浜 陵王 長慶子 演奏 多度雅楽会 問合せ Tel 0594-48-3484 |
| 紅葉ライトアップコンサート(滋賀) 11月22日(土) 午後7時 兵主大社 舞樂 蘇利古 厳島五常樂 出演 女人舞楽原笙会 問合せ Tel 0797-23-1886 |
| 久米舞 祭典の中で 錦天満宮 秋季大祭(京都) 11月25日(火) 午後2時より 舞樂 蘭陵王 納曾利 演奏 平安雅楽会 問合せ Tel 0744-22-3271 |
| 音輪会 第15回雅楽演奏会(京都) 11月29日(土) 午後5時半 京都コンサートホール(ムラタ) 前売3000円 当日3500円 管絃 双調 鳴破(延只拍子)同急 雅楽アラカルト 瑞霞苑一具 問合せ Tel 077-572-2013 |
| 第51回佼成雅楽会公演(東京) 12月7日(日) 午後1時 無料 立正俊成会法輪閣大ホール 管絃 双調 音取(延只拍子)賀殿急 舞樂 萬歳樂 延喜樂 還城樂 問合せ Tel 03-5341-1148 |

伶楽舍雅楽コンサート no.29 (東京)

雅楽の諸相

12月15日(月)午後7時 四谷区民ホール
予約2500円、当日3000円(全自由席)
芝祐靖作曲 五行長秋樂(初演)／吉川和夫
作曲 木々の記憶／エリザベス・ブラウン作
曲 ルビコン川／東野珠実作曲・構成 きき
みみずきん(委嘱初演)
問合せ Fax 03-5269-2011

鶴岡八幡宮 人長の舞(神奈川)

12月16日(火)午後5時半

御鎮座記念祭にて御神楽 人長の舞

春日大社 若宮おん祭 お旅所祭(奈良)

12月17日(水)夕方より

舞楽 東遊 振鉢 萬歳樂 延喜樂

地久 和舞 蘭陵王 納曾利 散手 貴徳

抜頭 落蹲 ほか

問合せ Tel 0467-22-0315

下鴨神社 御内御祈禱祭(京都)

12月22日(月)午後4時

御神楽 演奏 平安雅楽会

問合せ Tel 075-871-1972

厳島神社 天長祭(広島)

12月23日(火・祝)午前9時の天長祭に続いて

舞楽 振鉢 萬歳樂 延喜樂 蘭陵王

納曾利 長慶子

問合せ Tel 0829-44-2020

上賀茂神社 新年竟宴祭(京都)

1月5日(月)午後4時30分より

舞楽 未定 演奏 平安雅楽会

札幌コンサートホール 小ホール

一般3500円 小中高生500円 全席指定

問合せ Tel 011-520-1234

Kitaro ニューアイコンサート雅楽(北海道)

1月12日(月・祝)午後2時

演奏 伶楽舎

1月11-520-1234

ちよつとよりみちライブ(千葉)
「悠久の響き・雅楽プレコンサート」

演出 伶楽舎

1月15日(木)午後6時半

入場無料(予約不要)先着250名

きらホール(船橋市民文化創造館)

問合せ Tel 047-423-7261

博雅会雅楽東京公演 vol.2(東京)

『源氏物語と雅楽』

チケットプレゼント有り

1月28日(水)午後7時 前売3000円

渋谷区文化総合センター大和田伝承ホール

ゲスト 安齋省吾師 管絃 壱越調子

春鶯囀 舞具 朗詠 晓梁王 舞楽 青海波

演奏 博雅会

問合せ Tel 080-2415-2347

★★読者チケットプレゼント★★

☆宮田まゆみ笙独奏 10月13日、12月7日

☆サントリーホール(東京)各1名様ご招待

★10月4日、11月22日必着 引換券を送付

★神奈川雅楽部 10月22日

★かなづくホール(神奈川)10名様ご招待

★10月8日必着 招待券を送付

★雅楽翠華会 11月3日

★奈良県文化会館(奈良)5名様ご招待

★10月26日必着 招待券を送付

★音輪会 11月29日

★京都コンサートホール(京都)5名様ご招待

★10月14日必着 招待券を送付

★博雅会 1月28日

★渋谷伝承ホール(東京)5名様ご招待

★1月14日必着 招待券を送付

応募資格・雅楽だより定期購読者

応募方法・はがきに希望の演奏会 住所、氏名、電話番号など必要事項を記入。

東京都西東京市向台町6-12-6鈴木方

「雅楽だより」編集部

計報

小野功龍天王寺樂所雅亮会樂頭が8月30日早朝、多臓器不全で急逝されました。77歳。葬儀は9月3日、大阪の自坊の願泉寺で厳かに執り行われました。ご冥福をお祈りいたします。

ます。

。

芝祐靖先生へ質問を

新刊・新聞・「雅楽だより」合冊発行



寄付のお願い

ご協力いただけの方、寄付をお願い致します。
お振込は、購読料の口座へ、通信欄に「寄付」とご記入ください。

「雅楽だより」

ご協力いただけの方、寄付